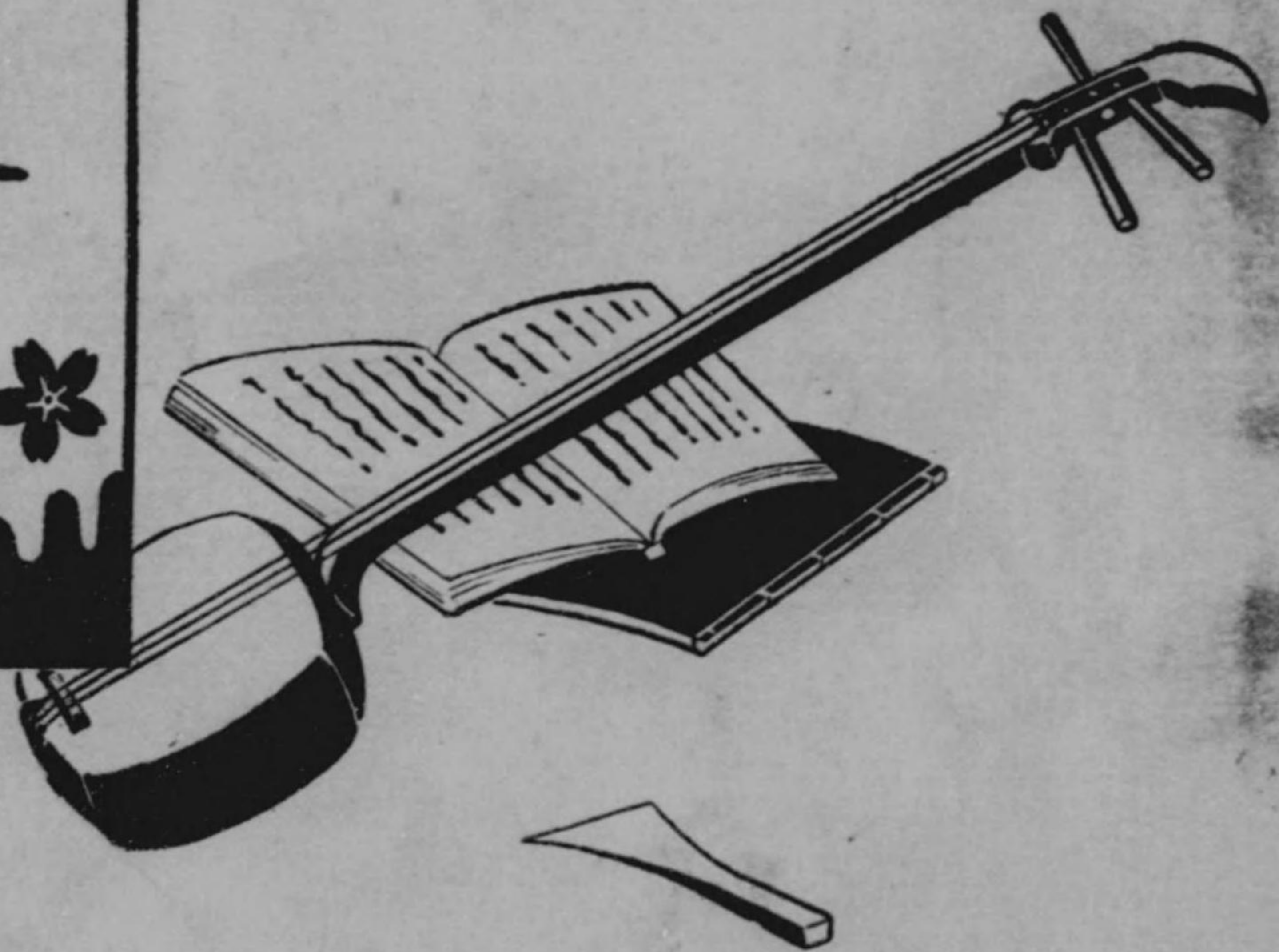


特220

248

芸妓とその由来



0053995000

1

0053995-000

特220-248

芸妓とその由来

秋山愛三郎・著

高橋書店

昭和8

AIB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



時220
248



秋山愛三郎著

藝げい妓しやとその由ゆ來らい



はしがき

本冊子は藝妓の事を外國人に私がどんな風に説明するか、主として藝妓や藝妓業に縁のある方々に読んで頂きたい爲め刊行したので、藝妓の内幕など素人の私が「盲人の垣覗き」で彼此書く事を差控へた、そのお積りて御覽願ひたい。

昭和八年初秋

編者識す

目次

- (一) 本冊子を私は何故書いたか? (一)
- (二) 藝妓を外國人に私はどんな風に説明するか? (三)
- (三) 藝妓の先祖は誰か? (五八)
- (四) 藝妓はいつ頃出来たか? (七〇)
- (五) 藝妓の行末は幸あるか? (七七)

以上



！いれきらあ、火花

本冊子を私は何故書いたか？

所變れば品變る。十人十色で。物事は見方次第でどうにも見ゆるもの。白い物も黒く。四角も三角に。家鴨も白鳥に見ゆるだらう。惚れた慾目には痘痕も笑窪。これが先づ人間の弱點であると同時に又長所となる事も往々あるのだ。外國人には富士山、櫻花、藝者、この三つが日本の三大名物に見えるさうだ。是は何如にも奇抜な取合せてはあるまいか？ 勿論これは戲談に言ふのであらう。だが、良い意味の戲談か悪い意味の戲談か、其所はちよつと判然せぬ一つの謎である。兎に角この取合せは皮肉たつぷりて何んとなく奥齒に物の挟まつた様な氣

がするのだ。一體斯様な取合せを外國人にさせる様にしたのは誰であらう？ 天邪鬼か？ 左様でもなささうだ。所がよく調べてみたら思ひも依らぬ日本人自身であるさうだ。それは外國向のポスターとか冊子の表紙に内外人が見倦きる程紋切形に富士山と櫻と美人を描くのが原因だといふのである。此美人が外國人の眼には藝者に見ゆるので我々が彼等に此取合せを間接に教へた様にもなる譯だ。左様なると彼等に向つて斯様な變挺な取合せを何故したかなどと責めると藪蛇を出すか、又は猿の尻笑となるのである。

世の中には面白い説を持出す者もあればあるもので、此取合せは或る日本通の外國人が花道の流派の中で生花の本義であると言ふ宇宙の

三才天地人に倣へて富士山は高いので天、櫻花は地上に咲くので地、藝者は人に見立てたのであると言ふが、斯様に我國の誇である花道を解釋されては、花道の名譽であるか藝者の名譽であるか、是は判断に困る問題である。けれども盗人にも三分の理ありとは能く言つたもので、成程理窟は附けやうと思へば附けられるものだ。富士山は我國無双の靈峯で淺間神社には木花之開耶姫の女神を御祀申してある世界的の山嶽だ。櫻は花の王で支那のものでも印度のものでも又西洋のものでもない、「櫻の日本」と言ふ位で武家時代には「花は櫻、人は武士」と持て嘶され、又神道の泰斗と仰がれてゐる本居宜長は「敷嶋の大和心を人間はば朝日に匂ふ山櫻花」と萬世不滅の和歌を詠つた。斯様な

歴々の名物の中に藝者が仲間入をする事になると地震、雷、火事、親父と一緒にやつて来た様な騒いで我々は河馬の様に大きな口を開けたまゝ、目玉をでんぐり返す位のものだ。けれども世界中に色々の名の附いた女は澤山あるが藝者と言ふものは絶対に他國にない日本獨特の女性で確に日本の名物に相違ないのだ。所で、人各々見方は違ふので富士山と櫻花と藝者を日本の三大名物に組合せたとして、その人の自由で他から苦情も持出せない譯だ。恐らく藝者の方より頼んで此名物の中に入れて貰つたとは受取れぬ。察するに西洋人の眼で見ると藝者のどこかに特別に良い見所があるので三大名物の中に入れてたのではあるまいか？ 何んと藝者は偉い者ではないかと今更ながら感心してしまつた。

滅多に藝者などと呼捨てしたら、それこそテキメンに罰が當るだらう。それなら何んとお呼申してよいのか？ 藝者様とても呼ぶのか？ そればかりと變だぞ、敬ひ方が足りない、もつと重々しい名で呼ばぬと勿體ない様な氣はせぬか？ それならいつそ御神燈に縁んで藝者大明神とでも呼んだら罰は當らぬものか？ 「そんな心配は一切無用」と御宣託があつた。藝者は浮世の事にかけては中々の苦勞人て人情味の持合せはたつぷりある。人間には罰など當てる様な不粹な者ではない。けれども毎晩お坐敷では、にこ／＼顔で、遠慮なく三味線に撥(罰)を當ててござるさうだ。

兎に角藝者といふ名稱は外國人の間に可成り廣く知れ渡つてゐる事

は確ではあるが、その外國人は藝者を能く理解してゐるか頗る怪いのである。それは藝者は我國特有のものなので藝者と娼妓の區別が判然と解つてゐないのは強ち無理とは言へぬ。そこで藝者と娼妓とごつちやにしてゐる外國人が随分酷く藝者の悪口を書物や新聞雑誌などに書いてゐるのを屢々見る事があるが。是は我國に取つて誠に遺憾な事である。其理由は外國の貴賓など來朝になつた時、純日本式の宴席にお招きすると殊の外お喜になる。そして斯かる宴席には必ず藝者が呼ばれて歌舞音曲をする習慣になつてゐるので、貴賓の席に侍る藝者を娼妓と混同されては誠に困つた事になる。それは藝者を娼妓と感違してゐる一部の外國貴婦人は醜業婦を宴席に侍らすとは甚だ以つて不都合で

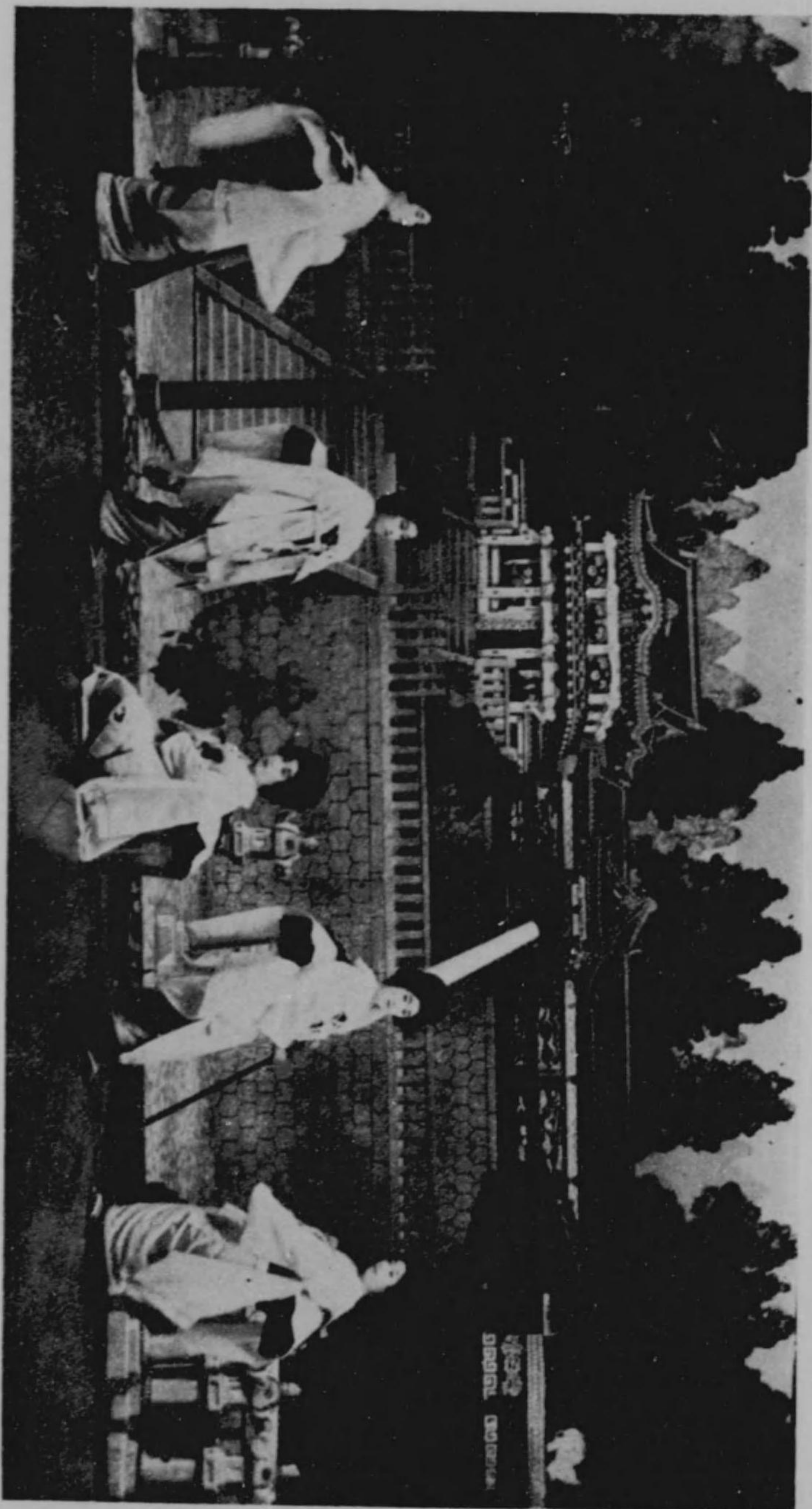


(京 東)

踊 東

あると言つて頗る不機嫌な顔をするといふ事を往々聞くからだ。實際
藝者を娼妓と同一に見做されてゐると、日本の紳士が貴賓を招待する
宴席に公然醜業婦を侍らす譯で確に失禮な事になるので、折角の御馳
走もだいなしになる許りでなく、我々日本人に取つて迷惑至極な事で、
我國の體面を尠からず傷ける事にもなる故、藝者は娼妓とは全く別の
者であるといふ事を明瞭に知らせておく必要が起るのである。所で、或
る方面の人々は藝者と娼妓と混同してゐる外國人を招待する宴席には
藝者を呼ばぬがよいなどと主張するが、純日本式宴席には藝者が出ぬ
と何んとかなく物足りない感じがする。又實際物足りないのである。そ
れは何んと言つても藝者はその職業柄お客を取扱ふ事にかけては十分

経験があつて坐興を添ふる獨特の手腕を持つてゐるからである。殊に観光客などは藝者の歌舞音曲と美しい日本服を着て居る藝者を眺めて珍しがるので、食事を出すより藝者を出して歌舞音曲をさせる方が遙に御馳走になる場合が多くあるかも知れぬ。禽獸魚鳥ですら教へずとも飲む事も食ふ事も知つてゐる。又教へずとも雄は雌にかかると知つてゐる。人間が飲食と性欲だけで満足する事になると一般動物と餘り變りない者となるが、人は萬物の靈長であるので美術、音楽、歌舞其他有らゆる趣味ある事物を嗜む。是が人間の本能である。宴席にて和氣霽々の裡に歌舞音曲を樂む日本人の奥床しき趣味と文化には外國人も羨むと同時に敬服して居るさうだ。斯様な譯で外國人を招待す



(京 東)

る純日本式宴席に藝者は呼ばぬがよいなどと言ふのは、全然外國人の嗜好を解せぬ者の言ふ事で、若し外國人の心理を能く辨へてゐたら、左様な事は決して言へない筈である。是も詰り藝者を酒席を斡旋する者とも遊藝人とも認めず、只風紀を亂す者とのみ一圖に思ふからで、盲千人目明千人の世ではあるが、これは盲が道を教へると同様なものではあるまいか？

日本は風景の誠に良い國であるので觀光外人が年々多數見物に來る、成程日本は風光明媚の國には相違ないが、美しい風景は日本だけの專有物ではない。外國にも風景の良い所は諸所にある。觀光客は何如に佳い景色だとして、そればかり見て満足して居るものでない。さう思ふ

と大間違である。観光客は勿論風景美の場所を見物に来るのではあるが、其外本國にて見られぬもの聞かれぬものを、見たり聞いたりしたい爲めに來るのである。是は常識から考へても高價な船賃を拂へ貴重な時間を費し萬里の波濤を越へて遙々來るのは洋食を味ひたい爲めでもなく、寢臺にねたい爲めでもなく又ビルディングを見物する爲めでもない。兎に角觀光客は本國にて見慣れ聞き慣れてゐるものは出来るだけ避けたいのである。我々日本人には一向詰らぬものでも彼等には非常に珍しいものもある。その反對に我々には面白いものでも彼等には尠しも面白いと思はれぬものもある。例へば神社佛閣の見物は日本人には大抵好かれるが、外國人には餘り感興を引かない、是は宗教上

の關係も一つの源因であるには相違ないが、寺院など全然同形なものは外國にある譯ではないが、支那でも印度でも幾分以寄りのものを見事があるなどと言つて、我々の思ふ程喜んで見物してゐる者は極く少數しかない。特別に研究の目的で見物する者は別として一般の觀光客は代表的の寺院なり神社なりを一二見物すると其以上は見物したがらぬし又普通しないのである。是は神社佛閣の由緒なども能く解らぬので興味を唆らぬのも一つの理由かも知れぬ。

櫻花は往時觀光外人に非常に喜ばれたものである。だが、今日では我々の考へてゐる程には喜ばれない様だ。それは觀光客の大部分を占めてゐる米國には先年我國より澤山移植した櫻樹が現今では年々美事

に咲くので米國人は言ふに及ばず多數の歐州人も米國に來た時見て居るので、我國に來て櫻花を見ても以前の様に初めて見るのではないので大して珍しいものとは思はぬ様子だ。勿論櫻花の満開は綺麗には相違ないので綺麗と言つて賞めるが、何んとなく其の賞める言葉に力を入れ方が以前とは全く違ふ。そして觀光客の中には一重櫻を見て「何んだ馬鹿に白つぽい花だ、梨子の花ではないか」などと小癢に障る事を言ふ者もある。尤も八重櫻は特に外國人の嗜好に適するか、皆一様に實に美しい〜と言ふ。だが、生憎この八重櫻が存外尠いので櫻花を樂みに來た觀光客はやや失望氣味だ。櫻は我國には色々の縁のあるもので我々には深い印象を與へる。それが爲め日本を外國に紹介する

に、一にも櫻、二にも櫻と、やかましく言つて櫻を持出すが、外國人には我々の考へてゐる程今では反響がない様だ。成程櫻花が觀光客を引いた時代もあつた。確にその時代があつたには相違ないが、現在ではさうは行かぬ。何時も柳の下に鱒は居らぬ。狐は同じ罨て二度は捕れぬものである。

然らば觀光客は日本に來て一體何を見たがるのかといふと、我國の靈峯富士山は何人に限らず見たがるのである。言ふまでもなく地球上には數へきれぬ程山嶽は有るので、富士山に似寄りの山があるだらうが、富岳には一種不思議の莊嚴さが現れてゐる爲めか、此山の様に全世界にその名聲を轟してゐるものは恐らく他には幾つもないと思はれ

る。鎌倉の大佛は流石世界的美術で皆賞める。日光の廟社を見て驚嘆するが裝飾すぎるなんて批評がましき事を言ふ者もある。だが、日光は何んと言つても大呼物である。奈良の法隆寺は古美術に興味を持つ者は涎を流すが、一般向とは思はれぬ。瀬戸内海の繪の様な景色を賞めぬ者はない。京都の葵祭、祇園祭、時代祭、二條離宮、二二三の寺院、大阪の天神祭、日本獨特の庭園、能、歌舞伎芝居、人形浄瑠璃、貴重な繪畫彫刻、以上は悉く観光客に殊に喜ばれるものだ。他にも喜ばれるものがあるにはある。例へば茶湯、生花の類もあるが、素通りの観光客には時間と準備の都合で見せたくも見せる事の出来ぬ場合が多い。尤も茶湯、生花は西洋人には解り憎いものなので見せても餘り喜

ばぬ者も時々ある。所で、男女老幼身分の區別なく一様に觀光外人が我々の想像以上に喜んで見物するものは「チエリーダンス」と言ふ名で世界中に知られてゐる京都の都踊と大阪の芦邊踊と東京の東踊とである。けれども其舞踊が外國人に公娼と混同されてゐる藝妓が出演するのであると誤解されてゐると折角の美しい舞踊も残念ながら醜いものに見ゆる事になる譯である。

言ふ迄もなく觀光客の中には、本國にて中々位置の高い方も多數あるので、何事に依らず成べく斯様な方々には悪い感じを尠しにても抱かせて歸國させたくない。斯ふ言つたとて決して外國人に諂ふ意味では更になく、堂々と紳士的に我國の文化と好意とを示したい爲めて、

藝者などの事についても同じ意味で、藝者は屢々外國の知名の士に接近するゆへ、出来るだけ善意に解して貰ひたいと思ふのである。だが、我國人中には不注意にも往々藝者の裏面の事を外國人に露骨に然かも悪様に平氣で話す人物を見受ける事がある。是は對外的には良くない事と思はれる。何人何職を問はず表裏は多少共有のもので、其内面の事を暴露するのは良い事ではない。外國人殊に遠來の觀光客などが藝者は面白い職業婦人であるとか、何んと綺麗な首がくつついてる女性だとか思つたら思はして置いて何が差支あるか？ 藝者の内面的の事など委しく話す必要は更にないやうだ。何が爲に此方から自國人の事を他國人に戲談にしる悪く吹聴するのであるか？ 是は誠に有害無益

の事である様に思はれる。藝者も我々の同胞に相違ない。してみれば外國人に彼等の裏面の事を問はれても、悪いと思ふ事は成べく言はない様にしてやるのが同胞に對する情ではあるまいか？ 古人が賣物には花を飾れと言つたが、強ひて藝者に我々が花を飾つてやる必要は勿論ないが、我國人である藝者に不利益になる事は差支ない限り何事も言はぬが花ではあるまいか？

觀光客は皆一樣に藝者の舞踊は一度は是非見たいといふ。それが爲め日本の紳士方は外國の知名の士又は友人が來ると日本式宴席に招待して必ず藝者の舞踊を見せる事になつてゐる位だ。その舞踊を何んだか詰らぬものの様に輕んずる當世人があるが、是は多分ダンスは知つ

て居ても我國の舞踊は盆踊に至る迄皆それ／＼國家に由緒のある事を知らぬ爲めてあらう。觀光客自身も通譯を連れて藝妓の舞踊を見に行く、そして藝者と會話をするが、後に十中八九迄は「藝者といふ者は驚く程頓智に長けてゐる。何事によらずお客を喜ばせる當意即妙の返答を立板に水を流す様にすらく／＼とやつてのける誠に面白い女性だ、日本の方々も酒席に藝者を侍らすのは道理ある事だ」と言ふそらだ。斯様な譯で藝者が公娼の一種と誤解されてゐては、折角深切に舞踊を見せてあげる方が迷惑する許りてなく、其方の人格まで疑はれる様になつて引合つた話ではない。斯様な事は一般の方々には恐らく氣に留める程の問題にはならぬかも知れぬ。だが、國際的と言ふとちと大袈

袈に聞ゆるが觀光事業方面から考へると餘り等閑にも出来ない事と思はれる。私は別段藝者に縁もゆかりもない者であるので殊更藝者を辯護する譯でも勿論ないが、觀光事業に興味を持つてゐるので、其見地から藝者は公娼では無いと言ふ事を一般外國人に知らせておく必要を認めた爲め大正十五年と本年七月と二回英文にて "Geisha Girl" と言ふ冊子を刊行したが、幾分にも役に立てば結構であると祈つて居る次第である。

本冊子を私が書いた動機は一部の外國人と外國かぶれの日本人が藝者の悪口を英字新聞雜誌書物に書いたものを時折私は見たり、又直接に聞かされたりする度毎に是を藝者に讀んでやつたり聞かせてやつた

ら嘸や憤慨して柳眉を逆立てるに相違ないが、悲い事には藝者は自分達の悪口など言はれてゐる事は夢にも知らぬ、尤も知つてゐても氣に留めぬかも知れぬが。けれども人間であつて見れば悪口を言はれて良い氣持のするものでもなく、又残念に思はぬものもあるまい。知らぬが佛で藝者は平氣の平左で居る様に見えるが誠に氣の毒な事である。是は丁度川の岸邊に三四歳の幼兒が餘念なく遊んでゐる。其兒は其川に落ちたら溺死する事を知らぬので無心で遊んでゐる。若し通り合せた者が此危ない有様を見ながら「あれは我兒ではない、ほつとけ」と言つて通り過ぎる事が出来るだらうか？ 人間の情愛のある者なれば恐らく出来ぬ事であらう。藝者は今や川の岸邊に何事も知らずに遊ん

てゐる可憐の幼兒の様に見えるのだ、早晚危険の身に迫るのも知らずに。噫誰ぞ世評を恐れず之を救つてみたいといふ勇氣ある快男子は出ぬものか？

藝者を外國人に私は

ごんな風に説明するか？

世の中には好き不好といふ事はよく有るもので、藝者を好く人もあれば好かぬ人もある。物事には表と裏が勿論あつて、藝者に良い所もあり又悪い所もあらう。だが、藝者は日本特有の女性で、現在の社會では色々の方面にて甚だ役に立つてゐる。これを法律上から見ると、その職業はお客に招かれて宴席に侍り興を添ふる爲めに歌舞音曲を爲す者で正當な職業婦人である。この藝者の事も祿々知らずに日本を完全に了解したなどと言ふ事は絶対に出来ないのである。

藝者といふ名稱は藝のある者といふ事で、歌舞音曲などの遊藝は勿論其他茶湯活花などの藝術も心得て居る者を藝者と言つて、普通は若くて容貌の美しいものである。尤も中には時間と入費を惜まず念入りにお化粧するお蔭で若くも綺麗にも見ゆる妓もある。大抵の藝者はその職業に十分経験があつて、お客を喜ばせる事は手に入つたもので、鳥の様な良い聲で唄ひ蝶の様にへんぼんと舞ふ。婦人用染織物の流行は藝者の着物や帯に眞先に現れるといふ工合で、藝者は外見上豊かな生活をしてゐる様に見えるが、月々會計に苦んで居る妓も澤山見受ける。又中には他人の羨む程仕合せな妓も可成多くあるが、全體から見ると浮世の荒浪にいつも悩まされて居る妓が大部分で有ると見るのが

まづ至當と思はれるのである。藝者は自分一人の爲めに稼いで居る妓もあるが、大多数は親の爲め兄弟の爲め姉妹の爲め自身を犠牲にして、この世智辛い生存競争の世の中で、立派な男子を向ふに廻して艱難辛苦して勇ましく働いて居るやうだ。是も身の爲め人の爲め、煎じ詰めれば皆生活の爲めて、藝者は人道から能く観察して見ると、氣の毒な人達であると言ふ事が出来るので、人情味のある方々は藝者の悪口するより寧ろ同情してやるのが至當ではあるまいか？ 弱い者窘めは決して見良いものではない。弱い者を助けてこそ始めて人間の美しい所が解るのである。

所が、或る方面の人々殊に婦人の一部と外國宣教師それに附隨して

居る人々などが藝者を手厳しく攻撃すると聞くが、それには勿論相當な理由は有るに相違あるまい。恐らく風紀上の見地からでもあらう。人の口には戸は立てられぬもの、攻撃するのは自由勝手だ。だが、一體この藝者を悪口する婦人はどんな人々かと聞いて見た事がある。これは多分私の聞き違ひか、又は悪意に私に話したのであるか、其所は判然せぬが、兎に角斯いふ婦人は少し年を取り過ぎた方とか、相當の年配であつても良い夫が見附からない者とか、夫が有る無しに係らず、大抵ご面相が餘りばつとしない爲め男子より熱い所か生温い「キツス」も頂載できないので、いつも不平な顔附をして居る婦人達である聞いた。聞かされた時には大いに驚いたが、ちつと考へて見たら成程と

合點が出来た。其譯は、喰べたら頬邊が落ちさうな旨い物でも見てくれの悪い物には手は出し憎い道理だ。餓しい時の不味い物なしと言ふ事はあるが、何如に餓しい男でもおかめとひよつとこの合作みたいな女には、うつかり手は出せまい、出したら大きな指を喰切られる虞があるだらう。お、恐い！

謹嚴其物であると聞いてゐる外國宣教師はお茶屋の敷居を跨いだ事のある者は恐らくあるまいと思ふ。又職務柄お茶屋の敷居は跨げない筈だ。日本人ですら藝者の内幕など容易に解らぬのに外國宣教師などに解つたら不思議な位なものだ。斯んな人達は藝者の真相を究めた事はないだらう。多分知人から復聞などして、それを種に頼まれもせぬ

に我國人の事を悪評するのではあるまいか？ 新聞紙上ではあるが外國宣教師とか耶蘇教信者の外人中には我國の學生に向つて神社に参拜するななどと亂暴な事を言ふ不心得者もある位だ、藝者を非難すること位は彼等にとつては朝飯前の事かも知れぬ。又中には自國人の悪い事は棚に上げ他國人の事ばかり悪く言ふ者もあるが憤むべき事だ。茲に西洋の偽らざる諺を原文にて一つ御覽に入れる事にする。

“Who loves not woman, wine, and song,

remains a fool his whole life long.”

(譯文。女と酒と歌とを愛さぬ者は生涯馬鹿で暮す) 彼等の國でも斯んな事を言つて喜んで居る者もある有様で、碧眼兒であらうが無から

うが人情には決して變りはない筈だ。福は内鬼は外。

藝者を非難する人達は、風紀を亂すといふ事以外には、藝者を非難する事は實際出来ないものである。其故藝者は淫であるとか、不品行であるとか、そして藝者の爲め數知れぬ程男子が身を亡ぼすと言ふのであるが、藝者許りが淫で他の女達は淫でない風紀も亂さないと思ふのは馬車馬みたいに前の方だけ見えて左右の見えない者の考で迂闊極まる考だ。黒人女は無論の事良家の娘さん達が皆品行が正しいと考へるのであるか？ 若し正しいと思つたら、それこそ世間見ずの言ふ事で、その短見は笑ふに堪へたりだ。風俗懷亂をやつてゐる娘さん達は目に餘る程ある様だ。これが目に這入らぬか？ 若し這入らぬなれば目は

あつても節穴同然であらう。藝者に風紀取締規則が必要なれば同時に當今の娘さん達にも此規則を適用し始めたらどんなものか？ 勿論全部の娘さん達が淫であると言ふ譯ではないのは知れきつた事である、只一部の娘さん達に適用したいのだ。藝者が居なければ風紀が保てるなどと思つたら、大間違で馬鹿／＼しい誤算である。そして今の男子は藝者に溺れるより安値な他の女に溺れる方が比較にならぬ程多いのだ。尤も此安値に最初思はれる女は終に滅法界高價ものに附くそうて「ちよつと舐めたが身の詰まり」とか「安物買の銭失ない」とか云ふ事が後に起るものと略定まつてゐるが。そこで藝者は言ふに及ばず此女達を残らず追拂つたら男子は安全かも知れぬが、其は飯の上の蠅で

儘に出来ない相談だらう。魚が大切なら猫を追ふより先づ其魚を大切に仕舞つて置くのが安全だ。だが、餘り念入りに仕舞つて置くと腐敗する虞がある。念には念を入れよと言ふ事はあるが、それは物によりきりだ。生きてゐる人間殊に血氣盛の若い者は其本能を發揮したい場合が屢々ある。又其本能を發揮したく感ずるのが當然で發揮したくない様なれば何處か身體に故障があるのだらう。生理的の事は自然の要求で人が拵へる理窟にあてはまらぬ事が多いやうだ。先づそんな譯で中々以つて簡單にかん／＼老爺の思ふ様にも行くまい。そのくせ此かんかん老爺も今は鹿爪らしい顔をして居ても若い時にはそれ相應にその本能を發揮した事もあるだらう。表から見ると立派に見えても裏に廻る

とそれ程でもないのが當世だ。此老爺も存外今でも内證でちよい／＼やつてゐる玉かも知れぬ。今の様に一部の人々ではあるが、藝者を酷く輕蔑する態度で見ると、喧しく言はずとも、藝者の方より御免を蒙つて遠からず全部消滅してしまふは請合で、既に其傾向が有るではないか。藝者が無くなつたとて別段社會に支障が來る譯では勿論ないのは百も二百も承知して居るが、我國の婦人は永い間の習慣で餘り實際社會に出ぬ。そして男子の宴席には尙更出ぬので、藝者などの自然的出現が需要供給の法則に従つて起る譯ではあるまいか？ 贅澤品でも必要に迫れば忽ち必需品となる道理である。殊に日本婦人は西洋婦人の様に男子の間に交はり活動するのは失禮ながらどう考へても不得

手の様に思はれる、のみならず習慣上好かぬ風もあるのは確である。例へ近い将来に日本婦人が交際社会に打つて出て盛んに男子と交際する事になると、若い方々に性的教育をもつと施して置く必要はあるまいか？ 有るまい所か大ありて根本的に施す必要があると思はれるが、どうか？ 現在の程度で男子の間に伍する事は安全であるか？ 危険は伴はないか？ 是は公平に考へる必要はあると思はれる。如何に最負目で見ても全然國情を異にする日本婦人は西洋婦人の様に自由に男子と交はる事は色々な事情で未だ出来ぬのである。又覺えない様でもある。左様に考へるのは認識不足かも知れぬが強ち間違とも言へないやうだ。斯んな譯で現在の社會に藝者の存在は不必要だと言ふ事は

出来ないと思はれるのである。藝者嫌の人々は藝者がなくなつたら溜飲が下がるであらう。だが、純日本式宴會酒席などは誠に淋しいものとなつて、料理屋で只むしゃく食ふだけでは頗る殺風景なものとはならぬか？ 差詰百貨店呉服装身化粧品商等々には大打撃ではないか？ 染織工業の方面から言つても、洋風婦人服は大抵單調な無地物などで極上等の日本婦人服の裏地に少し勝つた程度の品が多いので至極簡単だが、藝者は金爛錦其他高價な帯は勿論美麗なる友染の衣類を數多く使用するので染織業を發達させる一大原動力となつてゐると言つても差支ない位だ。普通の婦人なれば染返しても裏返しても又補布を當てれば間に合ふ場合でも藝者は商賣柄そらは行かぬ。懷中都合が

良し悪しに係らず時には借金してまでも必要な衣類を整へねばならぬのだ。其藝者が無くなると世界に誇る我國の染織工業の進歩が少なからず阻害されるのは火を見るよりも明かである。次ぎに觀光客の誰もが喜ぶ京都の春の最大呼物と云はれる都踊。音に名高き艶麗花の如き芦邊踊。帝都の名物と誇る壯麗なる東踊等は藝者が無くなると同時に消へ失せる譯になるのである。尤も觀光客の都合などで我國の風紀問題が左右されぬのは勿論知れきつた事であるが、藝者が無くなつた所で風紀上何程の改善が出来ると思ふか？ 恐らく何の効果もあるまい。却つて益々劣等な女達が現はれて風紀は愈々悪化する許りだらう。其時になると藝者の全盛時代の事を藝者好きの人は言ふ迄もなく今は

嫌な人迄も思ひ出すのではないか？ 覆水盆に歸らず。いつの世でも後悔は必らず後から来るものと決つてゐて前から来るものではない。成程鼻下長連の中には時折藝者の爲めに身を亡した者も又亡す者もあるだらう、絶対に無いとは保證出来兼ねるが、まづ當今は減多に無い様だ、極少數の官公吏や會社員の不正記事が偶々新聞などに出ると直ぐ官公吏や會社員全體が悪事を爲るものと早合點する様なものではあるまいか？ 近時は人智も發達し世の有様も變つてゐるので以前の様に呑氣な人は餘り見當らないので、有り餘る金銭も無いのに惜げもなく藝者遊に金銭を浪費する程の肝魂の大きい好男子は恐らく出て來まい、若し出て來たら珍らしい位のものである。

世間には、男子が金銭を失す女性は、藝者に限つた様に言ふ近眼的の見方をする人がよく有るが、金銭を失すのは何も藝者に限つた事ではあるまい。古いやつだが、娼妓に現をぬかして主家を追拂はれる小鼠大鼠の番頭さんや父親に勘當される道楽息子もあらう。新しい所では、眉毛を糸の様に細く長くして唇をトマトの様に眞赤に塗つたエロ百バアセントのカフェーの別嬪女給さんに鼻の下を遠慮會釋もなく長々と延ばして、紙入の底を敲く當世の通人もある。ダンスホールに這入り込んでダンサアの腰の自由自在に對手に合はして面白い様に動くのを見て氣を揉んだり、ダンサアの最尖端的にお化粧した顔に見惚れて、メートルを沸騰點まで上げて、ダンサアの腰を抱へて腋の下や其

下の方までも汗をかいて、夢中で踊つて居る間に懷中を空にする若い者もあれば又分別盛の者もある。女優に逆上させて祿に解りもせぬ沙翁の原書を小脇に抱へて劇通を氣取つて居る迄は未だ無事だが、終に女の尻を追廻し若し有つたら角屋敷まで人手に渡す様なハイカラ紳士もある。

斯んな譯で男子は藝者に許り金銭を費ふのではあるまい、他に幾らもある。例へ女でなくとも、男子が財産を失す段になると、競馬に熱中して、根岸はござれ淀はござれと日本中駈廻り、勝馬の賞金許り氣にして居ても、其他數へ切れぬ程色々の事で金銭を失すものだ。だが、どうしても藝者が此世に居ては男子に危険であると思ふなれば、藝者

は無論止すがよいが、序に娼妓もカフェーの女給もダンサーも女優も拳銃も刀劔も猫入らずもアダリンも出刀庖丁も一緒に綺麗さっぱり密閉して仕舞つて置いたらどんなものか？ 其でも未だ安心出来ぬと言ふなら、神様にでも御頼申して、色氣の出ない特別製の男を拵へて頂いたら、それで安心出来るか？ 然し藝者は其筋で嚴重に取締つて居る様であるから、側から餘りごた／＼言はずとも斯様な複雑した問題は時が自然に解決するもので船頭多くして船山に登る様な事は仕度ないのである。昭和の世では空襲されて爆弾を投下されても、びくともしない勇氣と用意のある日本人が、高の知れた藝者が此世に居たとて何んて危険物と思ふか？ 藝者が爆發したとて線香花火程の危険もあ

るまい。それを邪魔物にして危険とは冗談にも程度の有るもので、そんな馬鹿氣た事を思ふ様な腑甲斐ない者は一人もないだらう。

藝者には難癖を付け様と思ひば附ける事の出来る弱點が一つ有るには有るが、是は難癖を付ける方が無理かも知れぬ。此弱點を彼れ是れ言ふ人は恐らく木の股からでも生れた不粹な者では有るまいか？ 諸君、能く考へて頂きたい、藝者は靈魂の無い人形では無い、生きて居る、そして藝者も我々と同様に血も息も通つてゐる。藝者として別誂の身體では無い、我々と生理上尠の變りも無いので、我々と同じ様に笑ひもする、泣きもする、喜びもする、怒りもする、旨しい物などは殊に食べたがるし、慾もあれば、戀愛の事も勿論能く知つて居る。して

みると藝者とても自分の好きな男が見つかった場合に其人に傍惚れするとか、眞に愛する心がむら／＼と起るのは不思議は無い様に思はれる。尤も戀愛の美名の下にそれを亂用されては風紀上大いに困るのは知れきつた事であるが。兎に角藝者を非難する人達は藝者はお客より金錢を貰ふから不都合だ、金錢を貰つて關係すれば、それは公娼で有ると言ふのである。成程是は一應尤もな見方には相違ないが、例へ藝者で無い素人女が男と關係した場合又は關係する前に其男が金錢に不自由が無ければ、やはり相手の女の機嫌を取る爲めに其女に「ハンドバツク、フーライ」半襟はござれ衣類も承知何でもかても二つ返事で買つてやる。懐中の都合ではダイヤの指輪も奮發する、相手の女が貧乏な

れば金錢もどし／＼遣るだらう。又遣るのが當然であるのだ。只茲に素人女と藝者と限つた事はないが玄人女との相違が一つある。それは玄人女はエロ關係を結ぶ前に金を貰ふ場合が素人女より少し多いやうである。だが、是も哲學的見地より考へると問題になる程の事でないかも知れぬ。兎に角戀愛關係ばかり結んで其女に金錢も何も遣らぬ男は先づ頼もしい者ではあるまい。まして藝者など有り餘る程金錢を持つて居る筈もないので、お客が金錢を遣ると言つた時には見榮ばれより頬ばれが浮世だ、何にも遠慮して辭退するにも及ぶまい。お客にしても高價な衣裳を身に附けて綺麗で氣のきいた藝者に、上部ばかりかどうか分らぬが、優しい聲で旦那／＼と崇められたら満更嫌な氣持もす

まい故金銭を少し位遣つたとて惜い氣もせぬだらう。まつこと惜しければ遣らぬ迄の事で強て遣る必要は更にない。宜しく自由行動を取るべしだ。藝者は無理に取らうとは決して言はぬ。一流藝者になると金銭には存外さつぱりしたものでライスカレー一皿餘計に食べたら月末の會計にどう響くなどと、しみつたれた事を考へてゐる妓は滅多にないやうだ。

藝者はお世辭で客を丸めると悪口する者が往々あるが、世の中は片つ端から皆お世辭で持つて居るのだ、お世辭は藝者許りの專賣物ではない、どんな人でもお世辭は言ふ。そして随分空つ世辭を言ふ人がある。藝者は慣れて居るので上手にお世辭を言ふだけで殊更悪氣で言ふ

譯でもあるまい。何事に依らず善意に解したいのである。要するに男といふ者は大抵惚れた女に金銭を遣る事が樂の一つであるやうだ、是も女の歡心を得て愛情を得やうとする爲めであらう。そんな譯で男は時折「どうも尠ないが」などと、にや／＼笑つて、女に金銭を手渡し其手を痕の附く程しつかり握つて、キツスなど爲るか爲せられぬか、そこ迄は見届けぬが、先づそんな調子であるといふ事を耳に胼胝の出来る程きいてゐる。斯んな事は世間には有勝の事で聞くだけ野暮の骨頂で聞き人もない位だらう。してみれば藝者が客から金銭を貰つたとて勿論時と場合と事情とに依るが、強ち藝者許りを攻撃する譯にも行かない様な氣がするのである。だが、此問題は中々厄介な微妙な點があ

るので、大いに研究を要する事柄であるに相違ない。これを解決するのは盲人の綱渡りよりもつと困難ではあるまいか？

世間には夫が宴会とか料理屋とか其他藝者の出入する所に行くのを大層心配する神経質の細君が往々あやうだが、下等藝者の事はいざ知らず、一流藝者となるとお客に無暗に惚れるものでもなければ、戀愛關係など結ぶものでもない。事情不案内の爲め無益の取越し苦勞をするのであらうが、藝者は酸いも甘いも知りぬいて商賣柄柔かに見えても中々見識を持つて居るもので朋輩や出入のお茶屋などの手前も能く判へて想像以上に堅固で素人女のように戀愛にかけては脆いものでない。例へお客に何んと言はるるとも柳に風と受け流し、お客の口車な

どに乗る馬鹿な妓は滅多にない。却つて世間見ずの娘さんや若後家さんの方が遙に危険で不良男子に容易く弄ばれる傾きが確にある。藝者を能く理解されぬ若奥さん達は、藝者は御自分の旦那には皆惚れる様に思ふかも知れぬが、先づ左様な事は絶対に無いと見て差支ない。藝者はお客を喜ばせるのは商賣であるが、お客に惚れるのは商賣ではない。其故若い男を見たとつて良い男を見たとつて何んとも思ふものでない。一一そんな男に惚れたり、はれたりして居たら藝者は税金も拂ふ事も出来なければ、第一肝心な願が干上つてしまう。藝者には男の顔はちつとも珍らしく無い。お坐敷で毎晩色々な恰好な顔を見て居るのて見飽きて居る位だ。奥様方が思ふ様に藝者は男には惚れぬが、金に

は惚れるだらう。尤も金に惚れるのは世間に藝者許りではあるまい。金に惚れる男子はトラックで運び切れぬ程多数あるだらう。金銭が無ければ生活は出来ぬ。たとへ藝者が金銭を欲しがるとしても別段不思議もない當然である。金銭を欲しがつて不正を働き刑務所と云ふ浮世離れのした茶室ならぬ薄暗い窮窟な所へ行く男子は澤山あるが、藝者では金銭問題の爲め悪事をしてそんな恐しい別荘に行つた妓は聞いた事は無いやうだ。

已惚と瘡氣のない男はないと言ふが、已惚鏡といふ鏡を持たない婦人もないそうだ。若い奥様方は御自分の縹緞は美しいので衣通姫や小野小町が居つたなら、嗚や恥しく思ふて跣足で逃げ出すだらうなどと

已惚れて居る方もあるやうだ。そこで御自分の旦那様は天下に二人とない好い男で業平さんよりよつほど美男子に見ゆるかも知れぬが、その顔は藝者の眼で見ると「世の中には何んと變挺な顔も有れば有るものだ」なんと思はれてゐるかも知れぬ。若い男を見ると直ぐ變な氣になる淫らな娘や色氣たつぶり厚化粧で男の顔を眇の様な目附で見る中年増や、顔に大波小波が押し寄せて水氣たつぶり大年増ならいざ知らず、藝者は男を見ても氣は變にならない、變になつたら大變だ。若し男の事ばかり思つて居たら、身體が幾つ有つても續くものでない。丁度病人を病家の人達が心配する様に醫者が心配して居たら醫者自身が病人に成つてしまふ。坊主が葬式の度毎に喪主に同情して悲んで居たら、

坊主自身の命が縮まつて自分が葬式を出してもらう様に成るだらう。石の種類は澤山あれど寶石は尠い様なもので眞に美しい藝者も算へる程しか無いもので、そんな妓は疾くの昔然るべき方に約束済に成つてゐるので奥様方がお内で御心配なさる様な美しい妓はお氣の毒だが旦那の手では自由にならぬだらう。そんな譯で奥様達は餘り神經を尖らさず、落著いて居るのが奥床しくはないか？ 恪氣の角は誰も欲がらぬ、全然役に立たぬから。けれども鹿の角なら奈良でなくとも何處に行つても役に立つものだ。見當違ひの恪氣は眞つ晝間お化の出るより未だ間の抜けた氣がするので餘りしつこく恪氣ケ間しい事は旦那に言はぬが賢明な策ではあるまいか？ 眞黒に焦げたパンには、いくら良い

バタを付けても味は出ぬ。ほんのり狐色に焼いたパンにバタを付ければ味は良いものだ。斯んな戰略を奥様に採られると、旦那は却つて恐縮し「他所の御馳走より内の茶漬」といふ通り、旦那はお宅で大満足、奥さんにこゝ家内安全となるのは請合だ。さうなると奥さんの方から「旦那内に許り居てはお體に障りますよ、たまには藝者遊位なさいよ」と言ふ様に成つたら話せる奥さんだが、百のものなら九十九迄むづかしい事と始めから匙を投げて安心して諦めて置く事にする。破鍋に綴ぢ蓋は結構だが牝鶏が時を作る家は不吉だ。

兎に角星の様に多くある藝妓の事であるから、中には圖々しい妓もあるには有るだらうが、先づ普通では藝者の方よりお客に戀愛關係を

露骨に強ゆるなどいふ事は絶対にないのだ。斯ふ言ふと藝者に惚れられ様と思つてゐた若い方の中には、がっかりして折角顔に出た面炮が極り悪さうに引込むかも知れぬが、さう失望するにも及ばぬ。戀は思案の外だ。どんな拍子で美妓に首つたけ惚られぬものでもない。油断は大敵。振られて歸る果報者なんて弱音を吐く弱虫は當今では人氣者とはなれないのだ。戀と戦は手段を撰ばない。西洋で「戀の成るは其人に非ずして其人の手練にあり」と言つてゐる、道理く。

藝者は商賣柄とは言へながら、どのお客にも愛想よくお客を外さぬ其手腕は實に大したもの、是が藝者の値打の有る所であらう。けれども藝者はお客に關係などする氣は勿論ないが、お客をエロ的な眼附

て時々見る事は確にあるので、お客に變な所へ心配をかけたたり、又自惚心の種を蒔いたりする。これも能く考へて見ると、お客の自惚心から藝者の眼がエロ的に見へるので、是は藝者がお客を見る習慣性の眼附かも知れぬ。恐らく藝者の方では斯んな時にはお客の顔の店卸でもして居る位の事だらう。例へば、鼻の高いお客なれば此客の鼻は鞍馬山で牛若に劍術を教へた天狗様から釣銭を取りさうな高い鼻だとか。鼻の低い客であれば、此お客の鼻はデバアトの地下室の様にきちんと引込んでゐるとか。頭の禿てゐる客なれば、電燈の反射器には結構だが科學の力でもつと何かに利用する方法は無いものかとか。お客の頭が白毛なれば、銀狐の毛皮より品質はだいぶ劣るが口ハなら我慢して

襟巻に一つ欲しいとか。若紳士の香油で眞黒にてかゝり光つた頭を見ては油屋のマネキンボーイにすれば素敵だなんて考へて居るかも知れぬ。冗談はさてをき、九分九厘までお客が藝者の仇やかな美しい首に惚れ込んで、ぞく／＼しながら「あゝ、良い女だなあ」なんて、まさか涎も垂すまいが心の中で思ふと、眼尻は段々下る許り、熱は段々上る許りて一生懸命に金銭の綱を張つて、どうしても逃げられない様にして否應なしに綺麗な鳥を取捕まへて、良い聲を聞くのであるから、此鳥にたつぷり旨しい餌を遣るのが至當ではあるまいか。祿々餌も宛行つて遣れぬなら、始めより鳥など捕まへるのは罪作りである。お伽噺にある猿の様に蟹を臍して柿の種とお握飯と取り替へて自分だけ旨し

いお握飯を喰へるのは猿だから出来るが人間には出来ない藝當だ。これが俗に言ふ猿智慧で後で取返しつかぬ事が起るのだ。

藝者を悪く言ふ人達は大抵藝妓嫁業の方面になると明盲だ。盲は耳は敏いが物は見えぬもの、聾は目が早くて疑深いものと先づ相場は定つてゐるのだ。世の中には藝者は皆若い者許りて片つ端から風紀を亂すのが本業の様に考へて居る者もあるやうだが、其は極端な偏見である。人間には一から終まであつて、善人もあれば悪人もある様に、藝者にも一から終まである。良い妓もあれば悪い妓もある。全部が風紀を亂すと言ふのは可哀さうではあるまいか？ 實際藝者の方が素人のいたづら娘より貞操は遙かに堅固の場合が多いのである。一流藝者を仕立

るのは中々の苦心で青年男子を大學より出すより一層金がかかるかも知れぬ。尤も大學を卒業した所で始めは三十か五十圓の月給が關の山だ。それも就職口があれば仕合せの方である。一流藝者と成ると高等官でも及ばぬ収入が有るので職業婦人とすれば結構なものだ。斯様な立派な藝者は磨粉と把麩で面の澁皮を剥いただけで一人前と成る女達とは全然品物が異ふ。良い藝者は婚禮の宴席其他目出度い宴席内外貴賓を歓迎する園遊會等に屢々呼ばれて大切なお客を接待する役目を勤めるので誠に調法な者で、見方に依つては現社會に無くてはならぬ女性である。藝者には随分年を取つた者も可成多くある、四十は愚か五十六十の阪を越した者もある。尤も大部分は青春の眞盛りの妓で何時

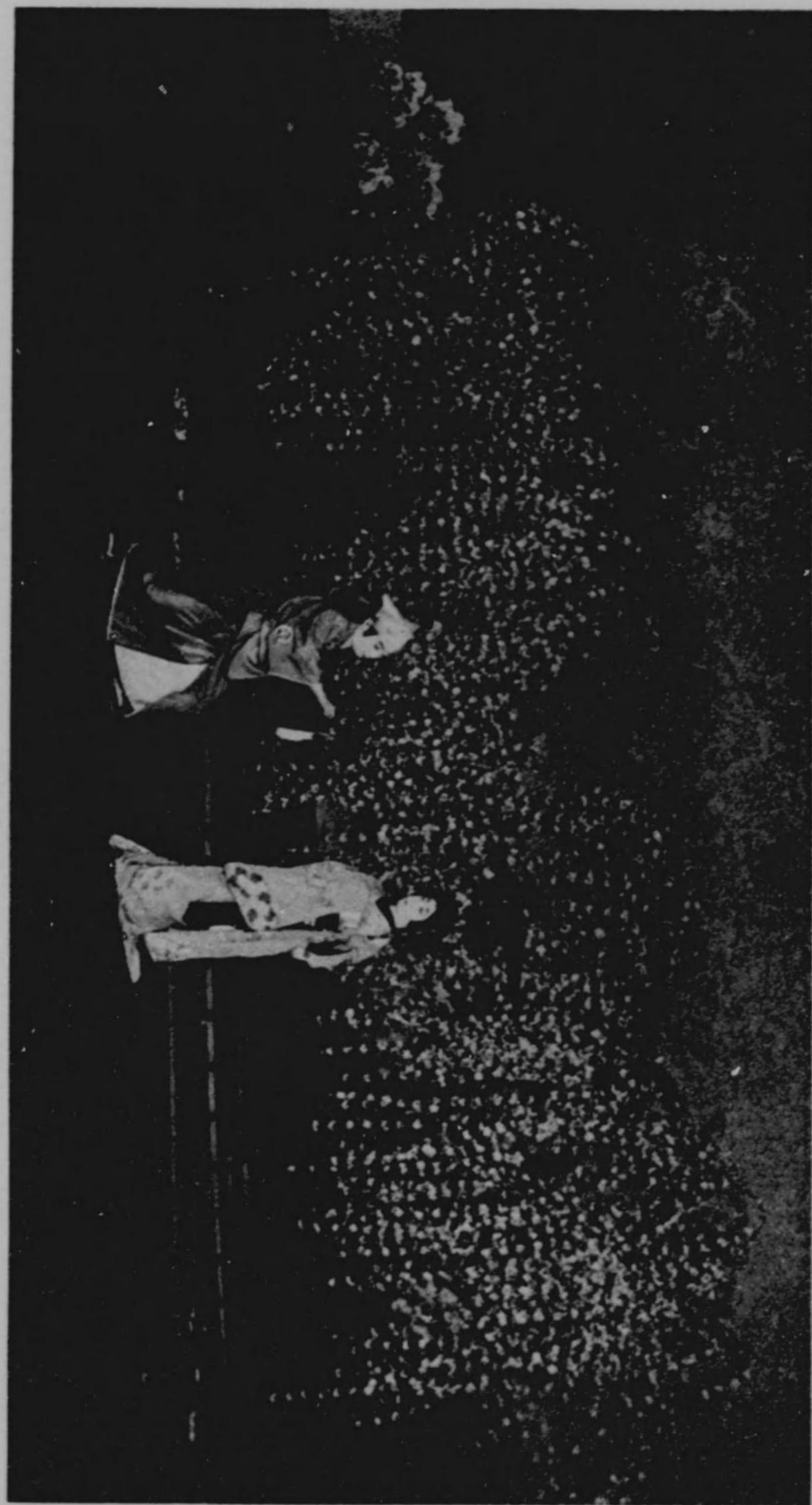
でも擁ぎ取つて食べられる様に美事に熟してゐる果物の様なものである。誰でも旨しさうな物を見れば食欲を咬るので食べたいといふ氣になるのが當然で、殊に血氣盛りの若者で胃の強い者が、旨しい物を見ても、大きな指先き許り舐つて我慢して食へないのは嘔や辛い事だらう。飢ゑたる犬は棒を恐れずだ。旨しい物でも毒になる物は絶対に止したがよいが、旨しい物で毒にならぬ物なら食べても差支ないだらう。動物は毒な物は自然に知つてゐる。我々も或る程度まで能く知つてゐる。事物は自然の法則に従ふより他に方法はあまい。斯く言ふたとて私は決して人間の美食家を奨励などする不量見は勿論微塵も無いのであるが、天理は先づ斯んなものではあるまいか？ 我々に聖人の様

な品行をせよと言つた所で糠に釘だ。さう出来る者が幾人あらうか？
まして藝者にそんな事を期待するのは木に縁りて魚を求め様なもの
だ。戀に上下の隔なく。頭禿ても浮氣は止まぬが世の習慣。若い男女
から色慾を取り去る事は實際出来ない相談だ。若し出来たら其は丁度
煎豆に花の咲く様なものである。我々は自分の蔭と角力は取れぬ。喧
嘩するには對手がいる。二人で喧嘩をすれば喧嘩兩成敗である。此理
窟が無理でなければ、假にお客と藝者と關係したとしても、お客には
悪い所はないが藝者許り淫らて悪いと言つてよいのであるか？ それ
はちと不公平とは思はぬか？ 片手落ち扱は不合理だ。兩方聞いて下
知をせよと言ふ事がある。量器は正確に持つて計るものではあるまい

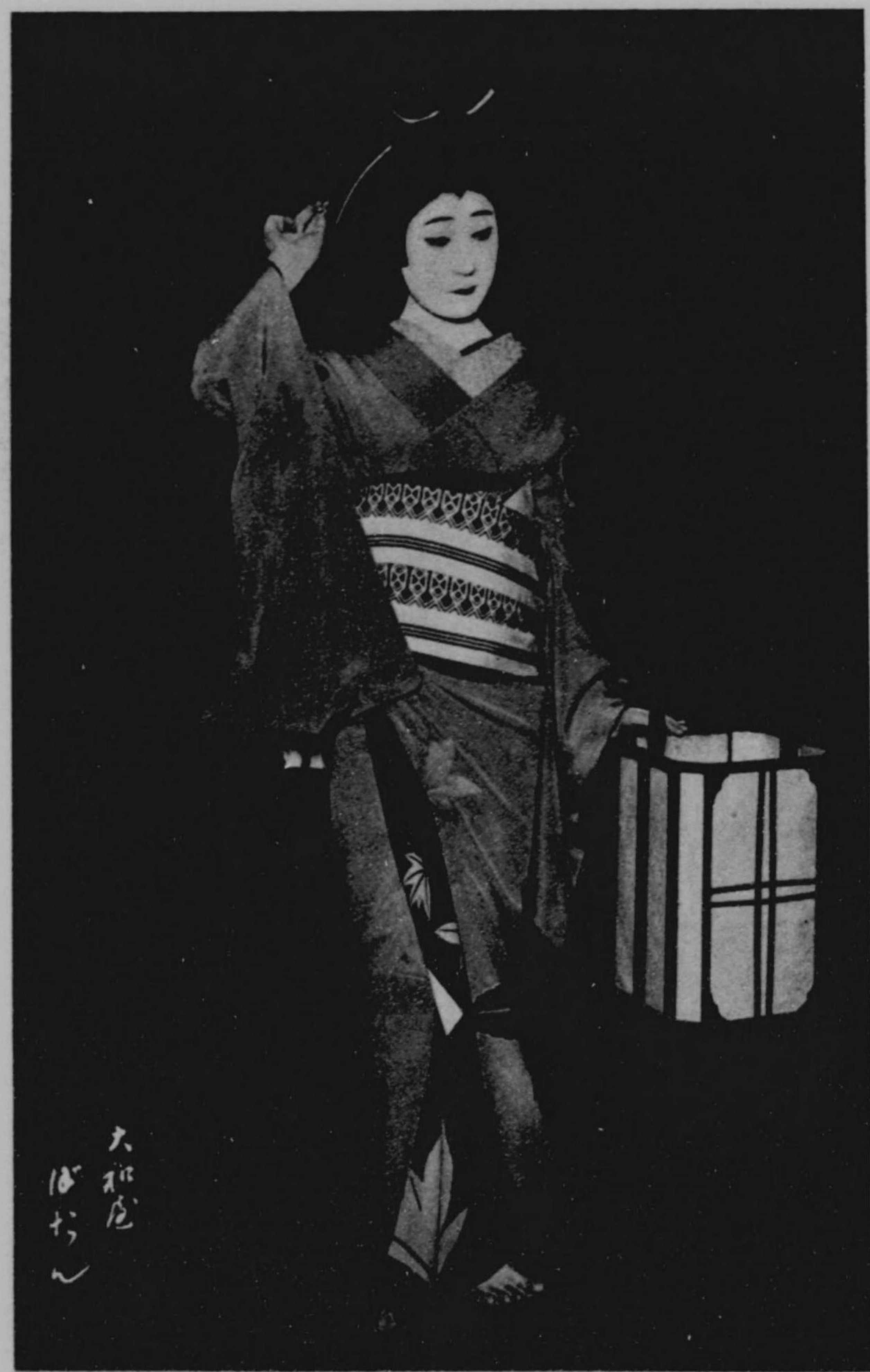
か？ 西洋の諺に「口を閉めて目を開けろ」といふ賢いのであるが我
國には其よりもつと賢いのである。其は比叡山に天台宗延曆寺を建て
た傳教大師で三疋の猿に譬へて言つた事である。
「他人の悪い事は見るな聞くな言ふな」と。

藝者の先祖は誰か？

年寄の物忘れ若い者の物知らず、老人の言ふ事と馬の鞆は外れさうで外れぬものだ。古い事物の起因は兎角曖昧なもので、藝者の起因も實は判然した事は解らないのであるが、其先祖は現今の一流藝者に色々の點で能く似てゐる白拍子ではあるまいかと思はるゝ事が古い歴史に書いてある。或る人々は藝者の先祖は奈良朝時代にゐた遊女と云ふ女性ではあるまいか？と言ふのだが是はちと怪いやうだ。此遊女は海岸近い國々を廻つて地方官や公用で地方に旅行した官吏などの相手に成つた者で歌舞音曲は勿論和歌も上手に行つたさうだ。



(版大)



(阪大) 會習溫大地南

白拍子と言ふのは八百餘年前の鳥羽院の御時鳥の千歳と和歌の前と云ふ二人の遊女が白き水干に立烏帽子を着け白鞆卷の太刀を佩き、鼓、笛、銅拍子等の樂器を用ひて詩歌又は佛神の本縁など謠ひて舞ひ始めたのである。白拍子舞を最初男舞と言つた。それは服裝が男子に似てゐたからである。後に烏帽子と太刀を廢し唯水干と袴ばかり着けて舞ふ様に成つたので白拍子と言ふ名稱に變つた。それより白拍子舞は日に月に盛んとなり遂に王朝末より鎌倉初期に京都と鎌倉に全盛を極めて貴人の宴に侍り歌舞を演じたり和歌を即吟しそれを歌ひて舞ひ、時折貴人の寵に身を任せた。今日の藝者に略似た所がある。

白拍子が烏帽子と腰刀を廢した理由は藤原通憲（信西）と言ふ人が

舞容が優しく無いと言つたのであると。此方は歌舞が大好きで、歌曲の佳いものを撰んで白拍子磯禪師に教へて舞はしたのが白拍子の始とも言はれてゐる。

通憲は兎に角白拍子舞には非常に關係の深い面白い歴史的人物であつた。鳥羽、崇徳、近衛の三朝に歴任した方で、宏才博覽典故に練達し經學、天文、算道、佛敎に通じ、詩歌管絃に堪能で在つたと言ふ珍しい人だ。天養元年兼々望んでゐた少訥言に屢々鳥羽法皇に御願して任ぜられた。久壽二年後白川天皇御即位遊ばされ通憲の妻朝子が天皇の乳母であつた爲め深く信任された。會々保元の亂が起り通憲勅を奉じて戦へ勝利を得たので大得意となり、降參した敵を廷臣の忠告も頑

として聽かず又天皇も通憲の意見に賛せられたので皆死刑に處してしまつた。其處で嵯峨天皇以來朝臣を死刑に處する事は久しく絶えてゐたが亦始つた。

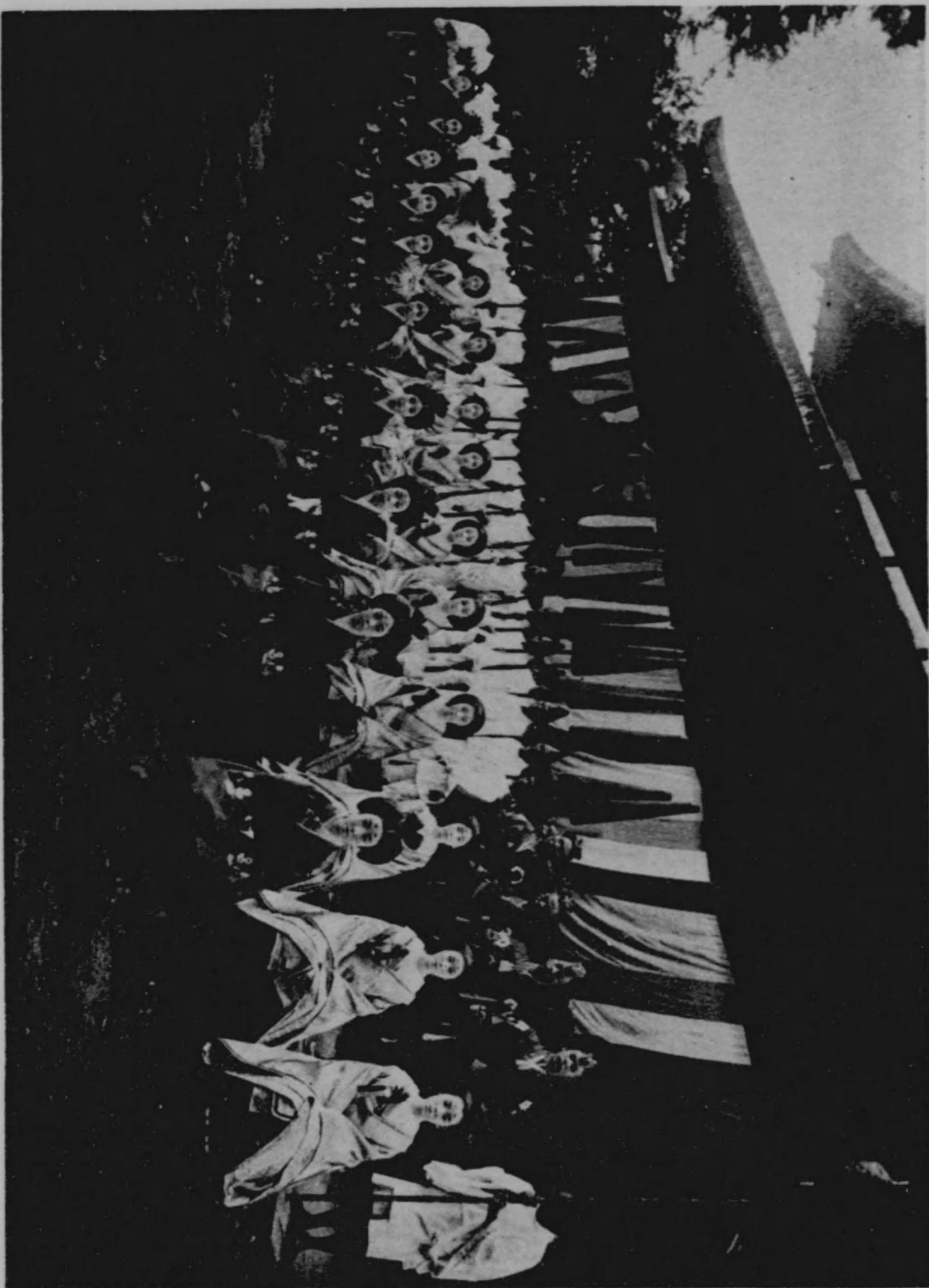
次いで二條天皇御位に即かれたが上皇政を執られたので、通憲の權勢は益々隆んであつた。だが、上皇に親眷されてゐた權中訥言信賴と不和なので、平治元年十二月平清盛が熊野參詣に行つた留守中に信賴は通憲の邸宅を焼きその婢妾も多く殺した。通憲は田原に逃げて穴を穿つて其内に隠れたが、到頭捕まつて信賴の命令で首を斬られて獄門に梟せられた。因果は廻る小車で盛者必滅の天理を的確に現した。

白拍子舞に特別の興味を持たれた方に通憲と同時代の源光行があ

る。詩が上手で鳥羽院の賞讃まで得た人で白拍子の舞曲を澤山作つた。承久の亂に連坐して死刑に處せられ斬首の間際即吟の詩が非凡な傑作なので死刑を免ぜられたと云ふ程の手腕を作詩には持つてゐた。

後鳥羽上皇も御自ら白拍子舞の歌曲を御増加遊ばされて舞女龜菊を御教習遊ばされたとの事である。

平清盛も白拍子舞が好きで殊更美しい白拍子は好きであつた。恐らく清盛ほど白拍子を寵愛した者はなかつたらう。京都堀川に妓王妓女と云ふ二人の美人白拍子がゐた。其母刀自も近江生れの白拍子で皆性質が優しいので評判が良かった。或日妓王と妓女が母の病氣平癒祈願の爲め石清水八幡宮に行く途中で清盛が見染めて母子三人共清盛の西



住吉神社寶の市神事

八條の第宅に引取つて夢中に成つて居た。其内に加賀の生れて佛御前と云ふ白拍子が清盛の所にやつて来て面會を申込むと、清盛大いに怒つて「佛であらうと神であらうと妓王妓女の様な綺麗な女が此世にあるか」と言つて佛御前を追返せと命じた。其處で佛は甚く失望して悄悄歸らうとした時、妓王は氣の毒に思ひ、清盛に寸時にても面會を許される様願つたので、佛は清盛の面前に通された。不圖己の前に現れた佛御前を見ると、こは抑何如に未だ嘗て見た事もない絶世の美人なので、清盛は只茫然と其顔を穴の明く程じつと見詰めて居るといふ有様だ。斯ふ成つては矢も楯も堪つたものではない、清盛は己が第に佛御前を引取つた。運は廻りもので一人て抑へ附けて居る譯には行かな

いものだ。其處で妓王妓女は急に嫌はれる様になり佛御前許り愛される様に成つたので二人は泣く／＼母を引連れ嵯峨に行つて終つた。出立の間際襖に書いた和歌は

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草

いづれか秋にあはてはつべき

と云ふ有名なものであつた。佛御前は是を見て喫驚仰天し妓王妓女の隠家に尋ねて行き二人が尼と成つて居るのを見て二度喫驚し、自分も麗しい黒髪を惜氣もなく切り落し尼と成つて共に一生を送つた。何んと浮世は果敢ないものではないか？ 何んと美しい奥床しい白拍子の心！ 嗚呼丈夫も及ばぬ立派な心！

天下に普く嬌名を謳はれ白拍子の女王と言はれた容貌の美しい義經の愛妾靜御前が鎌倉初期に現れた。義經は屢々戦功を立て評判が良過た爲め兄頼朝に嫉まれて兄弟不和と成つた。遂に文治元年の秋頼朝は土佐坊昌俊を遣して六條堀川に居た義經を夜襲させた。不意を喰つて義經は可愛い靜の手を取つて吉野山へ逃げたが、程なく山僧が攻めて來ると聞いて財寶を靜に與へて京都に供人を連れて歸す事にした。是が此世の離別とは神ならぬ身の二人とも知る由もなかつた。靜は泣く泣く歩きだした。一尺歩いては跡振り返り義經の姿が見え無くなる迄跡の方を見詰てゐたが、到頭霞の中に見え無くなつた。靜の心は破れる許り悲しく、羽が欲しい、翼が欲しい、あゝ鳥に成りたやと眼を泣

き腫らした。靜の供人は途中にて急に惡漢と變り主人の財物を奪つて逃げ去つた。跡に靜は只獨り山路に迷へ右も左も分らぬ山中に夜となぐ晝となく彷徨ふた。が、狼の餌食に成らなかつたのがせめてもであつた。慣れぬ山路で身體は綿の様に疲れ果て、足は擦剝けて血は滲み出す目も當てられぬ有様と成つた時、山僧に捕まつて六波羅に引連れられ一應北條時政の調があつて鎌倉に護送される事となつた。

靜が鎌倉に着くと頼朝公は義經の所在を審問したが、靜は知らぬときつぱり答へたので、どうする事も出来なかつた。最早これにて靜には用はない筈だが、丁度其時靜は妊娠して居たので頼朝は考へた、若し其兒が男で有つたら勝手が悪いと。そこで靜をなほ抑留して置く間

に頼朝の室政子は靜の歌舞を強ひて所望したので鶴岡八幡宮の社前にて靜は舞ふ事に成つた。工藤祐經が鼓を打ち、畠山重忠が銅拍子を打つた。靜は綺羅星の如く居流てゐる大小名の面前にて驚く程の沈着さを見せて、恐れず怯まず歌ひも歌つたり義經を慕ふ離別の曲を

吉野山みねの白雲ふみわけて

入りにし人のあとぞ戀しき

是は惚氣歌の様にも聞えるが靜の心を推量すると誠に可哀さうになるのである。靜は次に

賤やしづ賤の苧環くりかへし

昔を今になすよしもがな

と唱歌した。其聲と態度は絶妙なもので皆感動して終つた。是が文治二年四月四日の事であつた。靜御前は白拍子ではあつたが何んと氣高い女ではないか？

氏より育といふ事はあるが斯んな立派な女達が藝者の御先祖様であつたといふ事になると、今迄の様に藝者を輕んぜられないだらう。弘法も筆の誤、藝者を馬鹿にしてゐたのも今日まで其起因を知らぬ爲めて。だが、既往は咎めずだ。兎に角我々はうっかり藝者に失禮な言葉など使はぬ様に氣を附けねば成らぬかも知れぬ。今後は藝者と會話をしてゐる間にちよい／＼「遊ばせ」言葉位混ざる様にしてはどうだらうか？
閑話休題、靜の唱歌を聞いた頼朝公は頗る不機嫌で「關東の萬歳を

頌るのが當然であるのに叛人を慕つて離別の曲を歌ふとは何事ぞ」と烈火の如く怒つたが政子が傍より頼朝を諫めたので其儘無事にすんだ。程なく靜は男兒を生むので頼朝は安達清經に命じて由比濱に棄て様とした。靜は泣き叫んで氣も狂亂。その兒を渡すまじと一生懸命に争つたが到頭奪ひ取られて、見るも無慙に濱邊で首を落されて終つた。實に悲惨の極！鬼の仕業か？惡魔の戲か？美人薄命と云ふが眞にさう思はれてならぬ。けれども美人に生れたいと思はぬ女は恐らく此世に一人も無いだらう、お臺所に鎮坐しますお鍋どんでも金殿玉樓にお住いになるお姫さまでも。

藝者はいつ頃出来たか？

盛者必滅會者定離。生れ出たものは死ぬと定つてゐるのだ。三年たてば乞食も三歳になる。一度取つた年は跡に戻せぬもの、六十の梅干婆さんが鬼も十八番茶も出端といふ年に歸れると本人には誠に都合が好いだらうが、どつこい左様は此方の注文通りに問屋で卸して呉れぬ。尤も卸されたら大變で後の始末に困るのだ。此世の中に女といふものが十七八の別嬪さん許りに成つて終つたら働き盛りの若い者の仕事に差支が起るので。一匹の馬が狂へば千匹の馬も亦狂ふのだ。麒麟も老いては驚馬に劣る。始あるものは終ある道理。薊の花も一盛り。白拍

子も鎌倉時代の初期には一世を驚かした様な勢であつたが、それも束の間夢と消え鎌倉中期に猿樂と田樂が現れ南北朝以後大いに流行する様になつて白拍子は到頭衰へてしまつた。足利時代は戦亂續きて血腥く差しもの白拍子も殆んど忘れられて其舞曲は漸次能に取入れられ最後の幕が下りてしまつた。

藝妓と云ふ者は中世紀には無かつたので宴席などには遊女が今日の藝妓の様に歌も唄ひば舞踊もした。藝妓の先驅は踊子と云ふ女ださうだ。此踊子は何時頃現れたか判然せぬが、京都と大阪には寛文の頃多數のたやうだ。それが天和、貞享の頃江戸に来て大名や武士の屋敷又は料理屋などに呼ばれて酒席に侍べり歌舞音曲をした、其迄は無事で

別段何の差支も無いが、時折男子に或る秘密な御用を勤めたので終に公然の秘密と成つて八ヶ間敷なり、元祿二年五月其筋より始めてお小言を頂戴したが、左の耳から這入つて右の耳に抜ける位の事で何遍お小言があつても、策の中に水を入れる様なもので無駄であつた。

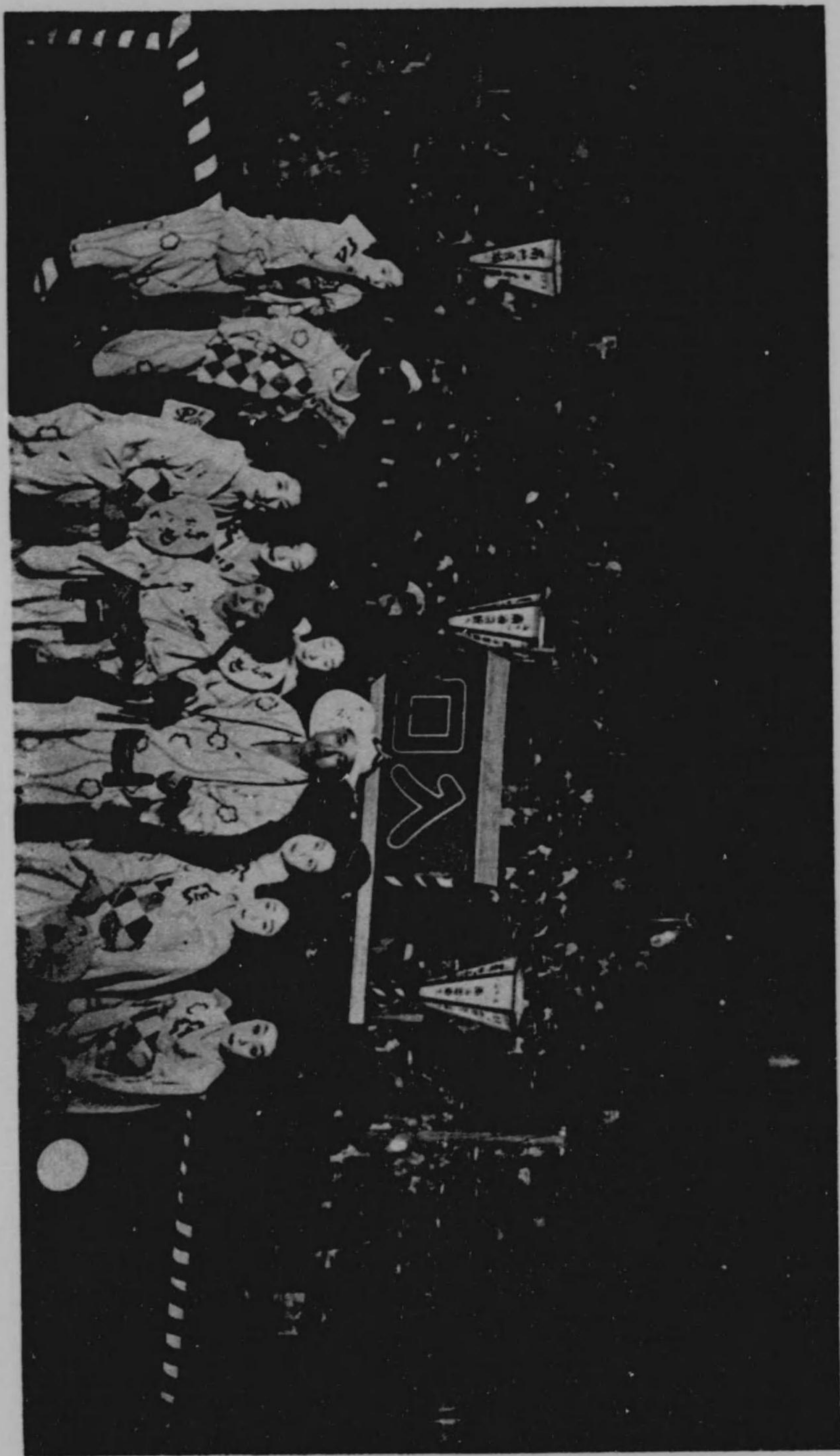
其後藝子と云ふ者が出来た。是は享保中であるとか、寶曆元年頃に始つたとか色々書物に書いてあるが、何れが正確であるかちよつと解り兼ねるのである。兎に角此藝子と云ふ者は踊子とは比較にならぬ程藝が良く出来て、上品で身持は誠に良つたさうである。元來宴席に呼ばれ職業的に歌舞音曲をした者を男女共皆一様に藝者と云つた。だが、男藝者。女藝者といふ二つに區別した名稱が附いてゐた。それが後に

男と女の頭字を取去つて、女藝者は單に藝者といふ事になり、男藝者は幫間と名を變へたのである。

江戸で最初の藝者と成つた者は寶曆十二年頃吉原の扇屋より現れた歌扇といふ女であつたと一般に信ぜられてゐる。歌扇は三味線が上手で大層評判の良い女であつた。歌扇に續いて雨後の筍の様に藝者が次ぎ次ぎと現れた。當時の藝者は色を賣らず専ら藝を賣る者ばかりで、廓の規則を能く守り、極めて品行も良く淫がましい事など尠もないので随つて中々の見識も有つて、其名稱の如く眞の藝者であつた。そんな譯で鐵漿を附けて居た妓もあれば、又お客の家に呼ばれた時母親が同伴した者も有つたさうだ。其後檢番と言ふものが出来て藝者の三絃を

預り置き、お坐敷への出入を檢べ風俗を取締る事が始つた。其内檢番は漸次發達して箱屋と言ふ者を抱へ置き藝者の出入玉數を調査する場所と成つたものである。

京都で藝者が最初現れたのは嶋原遊廓で、次いで寶暦元年頃祇園町に現れた。大阪では同年頃南新地に初めて藝者の姿を見たのだ。明治維新前までは江戸にて藝妓は吉原と柳橋だけに居たのが眞の藝者と認められて市中にゐた他の者は酌取女と唱へて、政府より女藝者とは認められなかつた。東京では現今は諸々に藝者は許可に成つてゐるが京都大阪では昔の通り廓に限つてゐる。京都の祇園町の情景は古典的で其味は無類な所があつて代表的京美人は茲に止めをさすだらう。大阪



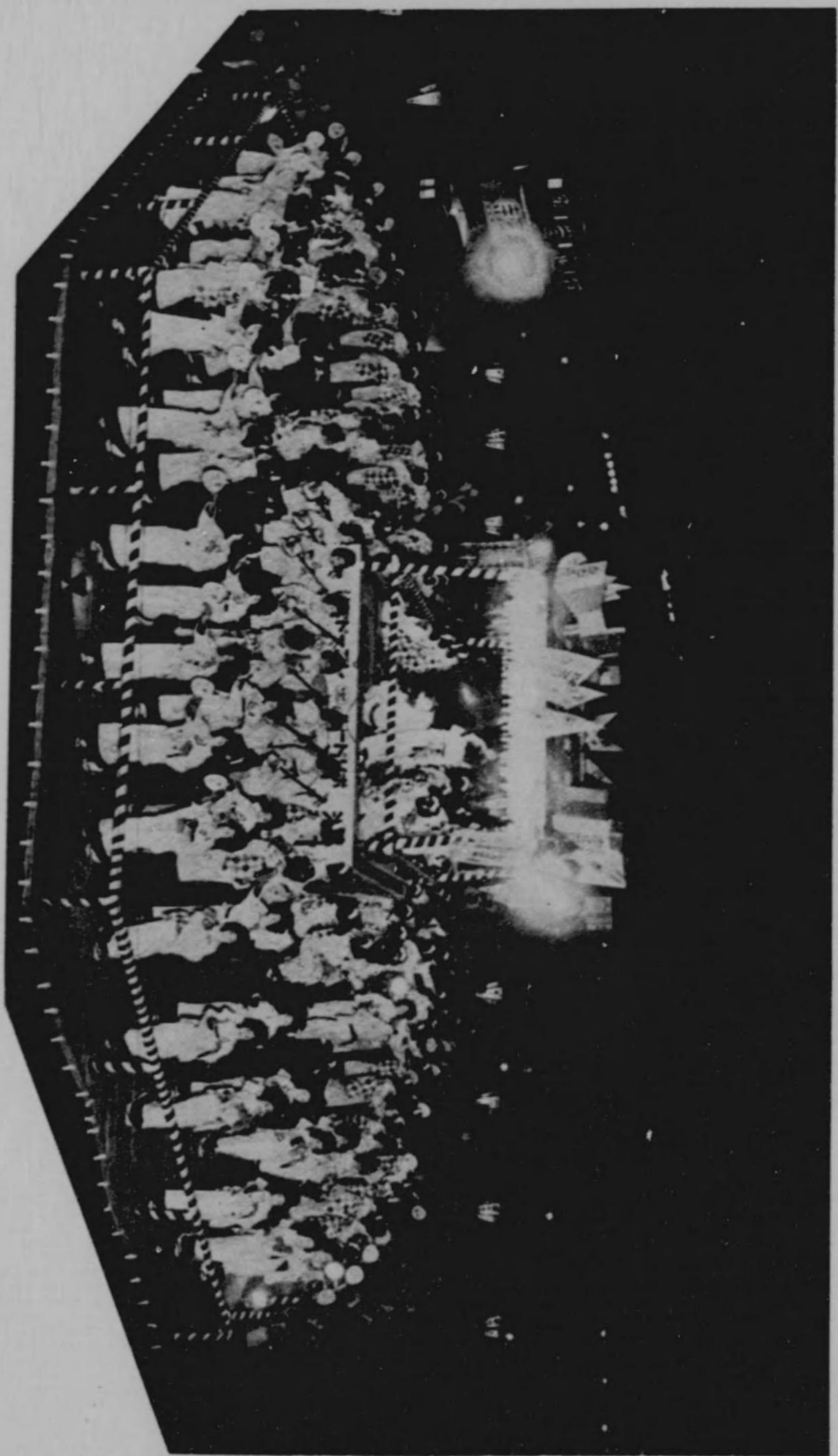
(阪大)

南地藝妓の盆踊

の南新地は市の中央にあつて其繁榮は實に驚く許りて、殊に大和屋は「立てば芍薬坐れば牡丹歩く姿は百合の花」式の佳麗な美妓を能くもあれ程澤山集めたもので流石は御大、阪口君の千里眼の様な鋭い眼は偉いものだ。帝都の藝者街も皆それ／＼盛んなもので格別新橋は素晴らしい勢で、その美妓は先づ百花爛漫と言ふ所だらう。

明治維新前までは藝者は必ず帯を長く垂らし長き笄を挿し「伊達の素足」と言つて夏冬共足袋を穿かなかつたのは娼妓と同じであつた。又客の前に出る時は勿論の事平常にも羽織を着なかつた。只深川の藝妓だけは羽織を着たので「羽織」とか「羽織藝者」とと綽名された。明治に入つてから帯を垂す事は段々廢れたが、當今も優式の日のみ帯を垂

らし笄を挿す風が所に依り多少残つてゐるやうだ。昔はお坐敷に出る時必ず最初は紋服を着て出て後に縞の衣服に着更へたものだが、今は最初の衣服も着更も同じのが大多数の様に見受けるのである。けれども全盛の妓になると昔の藝者が足元にも寄附けぬ程の豪華な衣裳を着けて居る。往時の藝者は歌舞音曲の遊藝は言ふに及ばず茶湯、活花、圍碁等まで心得又俗謡なども作つて歌つたもので實に立派な藝術家であつた。今でもそんな藝者は無い譯でもあるまいが斯様な藝者が今後益々多く出て藝術的職業婦人となつて欲いのだ。女の念力岩をも通す、大象も女の髪には繋がれると言ふてはないか？



(坂大)

跡盆の妓藝地南

藝者の行末は幸あるか？

太陽は西から上らぬもの、瓜の蔓に茄子は生らぬ。父親は男て母親は女。冷いものは猫の鼻と女の尻と定つてゐるが、思ひがけない事が起るのが浮世の習慣。瓢箪から駒は出ずとも、それに似た事はよく起るもの。我々の運は天に在り。何事も運次第。昨日の檻樓今日の錦。神様の目から見れば私共は皆同じで、藝者とても時節が来れば好運に恵まれて出世するのは當然で何の不思議もない事だ。けれども運は天に在り牡丹餅は棚に在りなんて呑気に構ひてゐたら運を取り逃すのは知れきつた事で。ぼかんと開いてゐる口には牡丹餅は滅多に落ちて来

ぬものだ。人は働いて自分の運を開拓するもの。藝者で國事に奔走なされた偉い方々や百萬長者や華族の奥様に成つたのが可成多くある。其人達は運もあつたに相違ないが其運を捕まへるだけ確に賢い者であつたに違ひない。賢い者は藝者の中には澤山あるが、只運の廻り合せが悪いので運が廻つて來ないだけだ。だが、運は廻りもの、運と月日は末を待てて、何時かは來るもの、短氣は損氣、待てば海路の日和あり。捨てる神もあれば助ける神もあるものだ。

此浮世を苦の沙娑とは良く言つたもので、苦の方が樂より勿論多いが、是も心の持ち方一つで苦の有るのが浮世で苦が有ればこそ樂も解る譯で、藝者は此浮世の苦を能く知りぬいて人情の機微を辨へて居る

苦勞人である。苦勞して得た幸福は本當の幸福で、人の犢鼻褌で角力を取らうとするのは不量見千萬。當事は外れ易いもの、當事と越中禪は向ふから外れるものと心得て居たら先づ滅多に間違はない。

無くて七癖有つて四十八癖。誰にも何か癖のあるもの。良い癖は附き憎いが悪い癖は付き易いもの。他人の事を悪く言ふ癖などは最も悪い癖である。世間には藝者を賤む癖のある人があるが何んで賤むのか藝者に悪い所が何處にあるか？ 只風紀を亂すなどといふ一點だけである。と略察せらるるが、藝者が一人残らず風紀を亂すといふ譯でもあるまい。風紀さい亂さなければ藝者は立派な遊藝人と見做して少しも差支ないので賤まれる理由は何處にも無いのだ。言ふ迄もなく藝者は

名譽の職業とは言はぬが正當の職業で我々は一般遊藝人と同等に取扱ふのが至當である。そして藝者を益々向上させ其自尊心を尙一層高めたいのである。

見榮坊と食辛坊は何處にもよく在るもので、人前では藝者の事を賤む様な見榮坊で、其くせ蔭に廻ると藝者が大好きな紳士(?)がよくあるが、是はちと卑怯で男らしくないのだ。斯様な滑稽も愛嬌の一つにも成るが、誰にも見透される斯様な體裁を作る人は蔭で藝者に長い舌を出される連中かも知れぬ。藝者は藝を賣るのが本業で色を賣る者で無いから公然と正當な藝人であると言ふ事が出来るのである。してみれば世間に遠慮なく藝者を宴席に呼んで何の差支があるか？ 嫌な所

へばかり氣を廻せばこそ遠慮する氣も出るだらうが、さもなければ藝者を宴席に侍らす事は更に差支ないのは當然すぎる程當然なのだ。だが、世間はどうしても細君には遠慮するだらう。

地獄の沙汰も金次第、金さい有れば飛ぶ鳥も落される、金に轉ぶが當今の人情是非もない世態には相違ないが、高位高官の方でも往々不正の事をやる。本人の破滅は自業自得で致方ないが家族の者に迷惑をかけたリ社會に害毒を流す不届者がある世の中で藝者の事はかり餘り手厳しく悪口する譯にも行かぬ理窟ではないか？ 弱い者窘めは見憎いもので武士道では鼻摘み、例へて武士道でなくとも弱い者窘めは眞つ平御免。臭い者身知らず、我子の悪事は見えぬもの。是が先づ人情で

あらうが我身を抓つて人の痛さを知れといふ事を辨へてゐたら他人の悪口など言へるものでない。藝者の内幕など祿々究めもせず非難はしても賞める事は知らぬ人は雀の涙ほども情はあるまい。

藝者は風紀を亂すと言ふより一部の紳士(?)が亂す様に仕向けるので實際は藝者に罪は無いと言つても先づ差支ない位のものだらう。金の威光は恐しいもの、可哀そうに未だ色も香もない蓄の雛妓や舞妓を無残に手折つたり、藝者を娼妓と誤解して金轡を飲めて風紀を亂させる。是が藝者を賤ませたり墮落させたりする原因を作るので藝者に許り罪を被せるのは誠に氣の毒ではあるまいか？

藝者は風紀を亂さず藝道さい磨いて居れば賤まれる所か押しも押れ

もせぬ藝術家と成つて世に持て嘶され遂に立身出世の糸口が出来るのである。綺麗な色は綺麗である程早く褪め易いもので、美しい藝者の容色もそれと同じ道理で存外早く衰へるもので、其時は容色の良い者ほど餘分に悲哀を感じるものだ。其故容色が良いとて餘り驕るのも愚な事であるが容色が良くないと悲観するのも愚な事である。素人女でも同様であるが藝者が出世するのは心立が優しく親孝行が第一である。幾ら容色の良い藝者でも心がけが悪かつたり親不孝者は何時かお客の耳に這入るので恐らく出世は出来ないものだ。勿論藝者には容色は大切なものには相違ないが、藝さい確りしてゐれば永く續くもので五十六でも死んだ後までも藝の勝れた者は賞められる。是が藝術の



ほろよ機嫌

貴い所であるのだ。

金は幾ら貴いものでも鐵の代用は出来ぬ。銀には銀の特色があり。銅には銅の用ひ所がある。ピアノにはピアノの特长がある。オルガンにはオルガンの勝れた點がある。我國獨特の三味線には外國人の迎も味ふ事の出来ぬ妙味があるのだ。藝者は藝者でなければ納まらぬ所があつて宴席に侍らして三味線を弾かせたり舞踊をさせたりしたら上手下手は別として外の者ではどうしても眞似の出来ない格別の良い所が有つて他の者では絶対に納まらぬものである。何程三味線の名人を連れて來ても何程舞踊の達人でも宴席には矢張藝者でなければ間に合はぬもので藝者はびつたり其に合ふ様に出來てゐるのだ。亦都踊、蘆邊

踊、東踊など皆藝者が出演すればこそ出来るので、又藝者が出演すればこそ見物に行く者もあるだらうが、他の藝人が演つたら恐らく誰も見物する氣に成らぬかも知れぬ。藝者遊び所か藝者の傍に寄つた事もない者には藝者の三味線の音色が酒の席でどう響くか祿々解らぬだらう。餅は餅屋で藝者の眞味や善悪など粹様でなければ判然と解らぬものである。藝者の舞踊に就ても世間には往々日本舞踊の知識もない者が「藝者の手踊か」などと何となく輕蔑した句調で言ふが、それは舞踊の能く解らぬ者の言ふ事で若し解つてゐたら言へる筈はないのだ。藝者の舞踊にも格段の相違があるもので、見物人に賞められる様に舞ひ踊れるまでには中々以て一通りの努力では出来ないのである。藝者

の舞踊に限らず我國の舞踊には各自相違な由緒あるもので誠に興味深いものである。

抑々神代には畏多くも天照大神天石窟に神居し給ふた時、群神の謀議により天鈿女命が戸前に立ち節面白く踊つたので大神何事ならんと戸を少しく御明け遊ばされる所を天手力男命が御手を取りて御引き出し参らせたのである。其時天鈿女命の踊が何如に重要な役目であつたか解るではないか！ 亦伊勢大神宮を初め春日神社等大なる神社には皆神樂殿が有つて神を慰め奉るため舞ふのである。實に舞踊は全世界に共通のもので亞弗利加の奥地に住む獸に等しい人間でも臺灣の生蕃でも文化を誇る西洋人でも皆舞踊は好むのである。殊に歐米人は毎夜

にてもダンスをやリたがる。此頃は我國にてもダンス熱に浮かれ過ぎては居らぬかと思はれる者もある。人が喜の極度に達した時「感極まつて踊る」とか「喜び手の舞ひ足の踏む所を知らず」とか言ふ。斯様な有様で舞踊は人間の喜の發露となるのである。してみれば我々が宴席に藝者を呼んで其舞踊を見たとして差支ないではないか？ 美麗なる衣裳を着けた美しい藝者の舞踊を見るのは贅澤の様にも見ゆるが美を好むのが文明人の象徴である以上是は當然の理ではないか？ 又對外的には我國生活状態の向上を示す尺度とも見られるのだ。言ふ迄もなく生活状態の低いのは未開人に多いのである。藝者の舞踊を見るのは贅澤と言ふ人もあらうが、贅澤といふことは其人の身分と懷中次第で

何れにも定まるものではあるまいか？ 蕎麥や饅頭の盛かけ一杯で我慢する人にはトンカツはちと贅澤に見ゆるかも知れぬ。トンカツ一皿で満足出来る者にはホテルや西洋料理店の僅か二、三圓の定食ですら贅澤に見ゆるだらう。百千萬長者には五圓は愚か十圓の定食でも又は藝者の舞踊位見たとて大して贅澤とは言へまい。上は手には上は手がある。藝者も其舞踊も嫌ひてパンと水とて腹の大部分を脹らましてア―メン／＼と有難がつて居る人も誠に結構には相違ないが、そんな人達許り居たら日本は一體どう成るのか？ 大いに働いて大いに遊ぶべしだ。「稼ぐに追つく貧乏なし」と言ふ事がある。青ざめた顔をして手を束ねて居るより元氣良く働くのに限る。國民の元氣が衰へては一國

の存立は難かしい。何事も元氣旺盛にやるべしだ。日本の富豪が藝者の舞踊位見たとて贅澤だなんて弱音を吐く様に成つたら大變だ。それこそ外國人に我國の富を疑はれる様になる虞はないか？ 兎に角歌舞は我國には大切なものと見て差支ないと思ふので、藝者も恐れず臆せず益々藝道を勉強して、食はず嫌ひの者には何んとも致方ないが、歌舞音曲に興味を持たれる方々の職務に疲勞なされた頭腦を慰める一助となつて欲いのである。

藝者は藝道さい勵むて居れば僻む必要もなければ勿論悲觀する必要も尙更ない。やがて藝者に對する現今の世間の賤む様な態度ががらりと變る時節が來るだらう、又來る様に是非したいのだ。渡る世間に鬼

は無^ない。水^{みづ}の行^ゆ方^{かた}と藝^{げい}者^{しや}の行^ゆ末^{すえ}などとふさぎ込^こまず、いつも晴^はやか^かに
 行^ゆ末^{すえ}に望^{のぞ}をかけ、藝^{げい}道^{どう}専^{せん}一^{いつ}に一生^{しやうけん}懸^{けん}命^{めい}腕^{うで}を磨^ひくのが大^{たい}切^{せつ}だ。何^{なに}にか望^{のぞ}
 がなげれば、人^{じん}間^{けん}は生^いきられぬもの。辛^{しん}抱^{ほう}する木^きにや金^{かね}が生^なる。笑^{わら}ふ
 門^{かど}には福^{ふく}來^きる。大^{おほ}いに笑^{わら}つて藝^{げい}者^{しや}の眞^{しん}の技^ぎ倆^{りやう}を現^{あらわ}せば其^{その}行^ゆ末^{すえ}に吃^{くつ}度^ど
 幸^{さい}がある。どうか藝^{げい}妓^ぎの行^ゆ末^{すえ}に幸^{さい}あれかすと私^{わたし}は、明^{あけ}暮^{くれ}彼^{かの}女^{めの}の身^みを案^{あん}
 じ、人^{ひと}の知^しらな^い苦^く勞^{らう}する。へい、おやかましう！

藝^{げい}者^{しや}とそ^の由^ゆ來^{らい} (終)

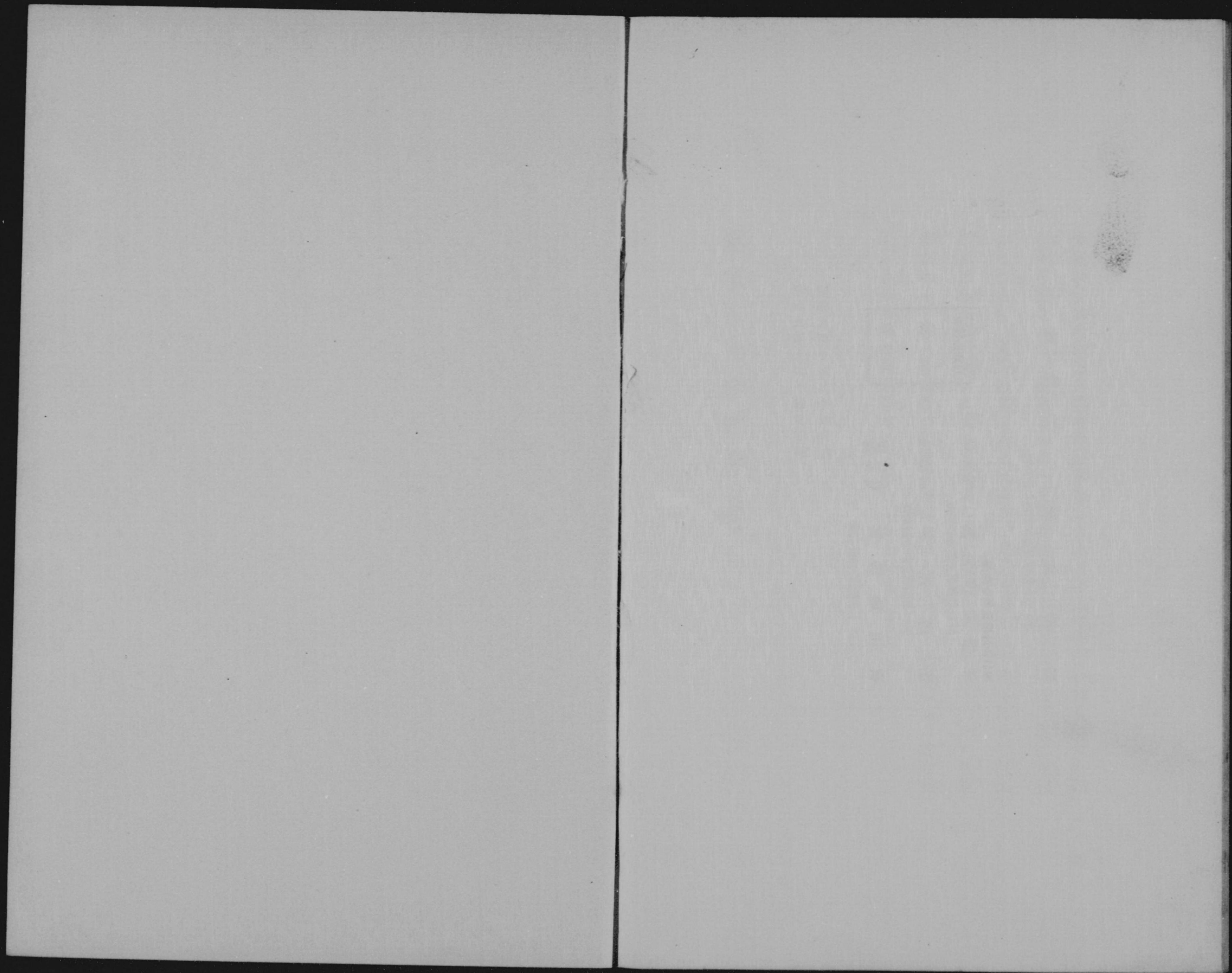
昭和八年十月十四日印刷
 昭和八年十月二十日發行

版	權
所	有
定	價
金	壹
圓	

著者兼 發行者 東京市芝區片門前町一ノ三 秋山愛三郎
 印刷者 東京市小石川區柳町二九 松本鐵彌
 印刷所 東京市小石川區柳町二九 柳文堂印刷所
 電話小石川四六八二番

發行所

東京市日比谷公園東帝國ホテル内
 高橋書店



56

18

18

18

